

Title	初期慶應義塾の學問
Sub Title	Academic activities in the early period of Keio-gijuku
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1954
Jtitle	史学 Vol.27, No.2/3 (1954. 5) ,p.81(179)- 121(219)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾史研究特輯
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19540500-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期慶應義塾の學問

中山一義

「學問」といふ窓を通して、安政五年十月の開塾の由來を考察すると、既に五年間の蘭學修業で、學問についてかなりの見識を持つてゐたらしい福澤の學問意識そのものから、直接福澤塾は生れ出たものではないらしく、開塾の機縁は、間接には時代の學問に對する要請に、直接には、奥平藩の有力者の時勢に動かされての決意のうち求めざるをえないものゝやうである。

安政五年といふ年は、四月に井伊直弼が大老となり、六月には嘉永六年ペリ來航以來六年越しの外交の總決算ともいふべき、通商條約の調印をみた年である。水戸を先鋒とする攘夷派の反對を押切つて、米國との間に結ばれたこの開港の取極めは、つゞいて年内に蘭露英佛の四國とも、同じ條約を締結させるほどに事態を急速に推進してゐる。幕府はこの年の五月には、砲術修業を獎勵する布令を出したり、七月には、官醫に洋法採用の許可を與へたりしてゐる。福澤

の後年の追憶にも、幕末洋學に志すものゝ多くは醫者の子弟で、醫學研究の目的でこれに従事してゐたが、ペルリ來航の前後から特に砲術研究が盛んになり、これに志するものがめだつてきたとある。幕府のうつたこれらの手も、根底には攘夷の意識が潜在してゐたかもしれぬが、幕府の開港方策と一聯の、學問の世界における政策とみられる。事實また、對外關係が急迫してきた嘉永安政の頃から、幕府は洋學の研究施設や教育機關を次々に創設し、年毎にこれらを整備強化してきてゐる。安政三年には前年來計畫中の蕃書調所が生れ、同四年には開講して、洋學研究並に教育の本山となり、同五年官醫の洋法採用許可の出た前後、同志の手で建てられた私設の種痘館は、萬延元年には幕府所管の種痘所として、洋法醫學研究並に教育の中心となり、また、安政元年以來計畫中であつた講武場創設のことが、同三年講武所として實現し、これが慶應年間に陸軍所・海軍所となつて洋式軍備の礎を置くといふ工合である。諸藩にもそれに似たことは多々みいだされるので、福澤塾の誕生も、このやうにみてみると、開國といふ情勢の中から生れでた幕府や諸藩の洋學教育機關創設の企てと全く無縁のものではなさうである。

けだし、開港前後の時勢の急變は、奥平藩の重役のこゝろをゆり動かさずにはゐなかつたであらう。開塾はこの人達の考への中から、直接生れたものと判斷してよさうに思はれるが、たゞその考へそのものゝ内實を「學問」といふ窓を通して明確につかまうとするとむづかしい。幕末もこの頃まで押しつまつてくると、諸藩にも、洋學を學問修業の枠の中に、公然と採用するものがでてきてゐるが、その方式は種々であつて、既設の藩校内に學問の一科として加設するもの、洋學寮の如きものを附設するもの、新に別箇に洋學所を創設するもの等一樣でない。しかも、その洋學採用の名儀とでもいふべきものは、福澤の上述の追懷にもあるやうに、當時の情勢から判斷して、砲術修業という言葉が示す通

り、主として國防軍備の線に沿ふものとみるべきで、その他の目的があつたにしても、それは表面には出ず、國防に意識的に集中されてゐたとみるのが妥當であらう。ところで、藩校内に洋學の一科を加設したり、殊に獨立した洋學所を創立したりすることは、金も人手も多く要すること、どこかの藩でも簡単にできることではなかつた。奥平藩も時代の趨勢の外に特立してゐることはできなかつたとみえて、開塾以前、江戸においては、岡見彦三の如き蘭學好きの有力者が世話をして、他藩の蘭學者松木弘安や杉亨二を招き、藩の子弟への教授を依頼してゐたといふが、兩人のその頃の動靜から判斷して、開塾前せいぐ一、二年ほどのことであらうと推定される。福澤が長崎へ遊學した安政元年の頃や、翌年大阪の緒方塾へ入門した頃には、未だ蘭學修業は長崎や大阪や江戸の如き限られた土地へ遊學するのが、修學の普通のかたちで、江戸の如き土地に、たとへ藩邸内にしても、他藩から蘭學者を招いてまで、藩士に蘭學の修業を勸奨しようといふほどの熱意を、當路のものがいだくやうになつたのは、安政三、四年の交りのことと推定される。ここ一、二年のところで急に情勢が變化してゐるとみることが出来る。蕃書調所の誕生が安政三年で、開校は同四年になつてゐるのもこの間の消息を物語る。米國總領事ハリスの外交攻勢の急迫を極めたのも、まさにこの頃のことである。一方にまた、國家統一への要求がことに明らかに人々の心を占めるやうになるとともに、他方では、幕府は幕府で、諸藩は諸藩で、内外のむつかしい政情に對應するために、それぞれの立場から、富強策を圖りだしたのもこの頃のことであつた。洋學の學習は、このやうな幕末の、それも維新を十年ほど後にひかへた頃の強い時代的要請であつたと考へられる。

松木弘安は安政三年から、杉亨二は萬延元年から、幕府に登用され、調所において教授の御用をつとめてゐる。杉は

緒方塾における福澤の先輩でもあつた。このやうな兩人を招いて、藩士に蘭學教授をさせてゐたのを、藩士の福澤に切り換へるについては、福澤が裏から畫策したやうな形跡はないらしい。岡見の耳に福澤のうわさがどのやうな経路で入つたものか、それも判然としない。しかし、入門の順から云へば、緒方塾における先輩に當る杉の推薦によるのではなからうか。同門の先輩が、福澤の大阪でのその頃の勉學振りと評判とを語つて、推舉したといふことはありさうなものと考へられる。他藩の學者の借りものでは、余分の金もかゝるし、何かと不便のことも多かつたかもしれない。その意味で、福澤に切り換へようとした岡見の發意は、至極平凡な思ひつきであるといふこともできる。極端な言分を以てすれば、藩士のうちに他に蘭學に堪能なものがあれば、何も福澤に限つたことではなかつたのかもしれない。このやうな推定が、もし當つてゐるとすれば、福澤塾の開設は、上述のやうな幕末の時勢の急變が生んだ一種の偶然を機縁として成立したと判断せざるをえない。たまく福澤が、五年程前から砲術修業といふ名儀で、蘭學を修め、相當の上達を示してゐて、他に然るべき人物がなかつたといふ、一つの偶然が福澤塾をうむ重大な機縁となつたといふこともできよう。それにしても、この偶然は、一歩しりぞいて、大きく時代の動きを見渡すとき、單なる偶然として見過すことはできない。福澤の後年の述懐によると、はじめ蘭學を學ぶことになつたその動機は、砲術修業といふ時代の要請であつたといふ。

安政元年二月、即ち私の年二十一歳（正味十九歳三箇月）の時である。其時分には中津の藩地に横文字を讀む者がないのみならず、横文字を見たものもなかつた。都會の地には洋學と云ふものは百年も前からありながら、中津は田舎の事であるから、原書は扱置き、横文字を見たことがなかつた。所が其頃は丁度ペルリの來た時で、亞米利

加の軍鑑が江戸に來たと云ふことは田舎でも皆知て、同時に砲術と云ふことが大變喧しくなつて來て、ソコデ砲術を學ぶものは皆和蘭流に就て學ぶので、其時私の兄が申すに、「和蘭の砲術を取調べるには如何しても原書を讀まなければならぬ」と云ふから、私には分らぬ。「原書とは何の事です」と兄に質問すると、兄の答に「原書と云ふは和蘭出版の横文字の書だ。今、日本に翻譯書と云ふものがあつて、西洋の事を書いてあるけれども、眞實の事を調べるには其大本の蘭文の書を讀まなければならぬ。夫れに就ては貴様は其原書を讀む氣はないか」と云ふ。所が私は素と漢書を學んで居るとき、同年輩の朋友の中では何時も出來が好くて讀書講義に苦勞がなかつたから、自分にも自然頼みにする氣があつたと思はれる。「人の讀むものなら横文字でも何でも讀みませう」と、ソコデ兄弟の相談は出來て、其時丁度兄が長崎へ行く序に任せ、兄の供をして參りました。長崎に落付き、始めて横文字の *ABC* と云ふものを習ふた。……（「福翁自傳」）

この時兄三之助は數へ年二十九歳、弟の諭吉は八つ下の二十一歳であつた。ペルリの來航が九州の片隅に住む貧乏士族の若い二人の青年に、右のやうな相談をさせ、その相談が後年慶應義塾を生む端緒となり、日本の近代學問の先驅的炬火の口火となつたことを思ふと、まことに興味深い。歴史の上に現はれる必然と、その上にうかぶ幾つかの偶然と、この二つの交叉するところで、個人が行ふ自由な決斷、これら三つのものが、そこには見事に織り成されてゐる觀がある。

しかし、砲術修業といふ時代の要請が、福澤を蘭學の世界へ引き入れたとはいへ、長崎における一年間の勉學中、砲術家の食客をしながら、砲術書の書寫などをしてはゐたものの、福澤の身を入れた學習の方向は語學の勉強にあつたら

しい。やがて、江戸で勉學を続けようと決意して長崎を去つて大阪に立ちよつた福澤が、「大阪でも先生がありさうなものぢや」という兄の反對意見に遇つて、捜し當てたのが、過書町の蘭法醫緒方洪庵であつた。したがつて、このやうな事情で、緒方塾へ入門した福澤には、はじめから醫術を學ぶ意志があつたわけではなさうに見えるばかりでなく、緒方塾における勉學の模様やその後の言行から推察して、醫者にならうと考へてゐたらしい形跡もなさうである。さう云へば、前年の長崎行きの際とても、(後年の追懷であるから割引して受けとるとしても、)自發的に砲術修業を志したわけではなく、福澤の内心では、ある意味において、中津の窮屈な空氣から脱出することさへできるなら、名儀は砲術でも何でもよかつたらしい。

前後四年間の緒方塾での勉學の目的が、砲術になかつたことは勿論、醫術そのものにもなかつたことは、左に示す福澤の後年における述懐にも明らかに察知される。緒方塾入門の翌年、病氣歸省中の兄三之助が病死したので、福澤は急遽中津に歸り、家督を相續し、後仕末をして、母の許しもうけ、勉強をつゞける爲めに、

愈よ大阪に出やうとすると、茲に可笑しい事がある。今度出るには藩に願書を出さなければならぬ。可笑しいとも何とも云ひやうがない。是れまで私は部屋住だから外に出るからと云て届も願も要らぬ。颯々と出入したが、今度には假初にも一家の主人であるから願書を出さなければならぬ。(中略)出拔けに蘭學の修業に參りたいと願書を出す、懇意な其筋の人から内々知らせて呉れるに、「それはイケない。蘭學修業と云ふことは御家に先例のない事だ」と云ふ。「そんなら如何すれば宜いか」と尋れば、「左様さ。砲術修業と書いたならば濟むだらう」と云ふ。「けれども緒方と云へば大阪の開業醫師だ。お醫者様の處に銃砲を習ひに行くと云ふのは、世の中に餘り例のない事の

やうに思はれる。是れこそ却て不都合な話ではござらぬか」「イヤ、それは何としても御例ごれいのない事は仕方がない。事實相違しても宜しいから、矢張り砲術修業でなければ濟まぬ」と云ふから、「エー宜しい。如何でも爲ませう」と云て、ソレカラ私儀大阪表緒方洪庵の許に砲術修業に罷越したい云々と願書を出して聞濟になつて、大阪に出ることになつた。大抵當時の世の中の監梅式が分るであらうと云ふのは、是れは必ずしも中津一藩に限らず、日本國中悉く漢學の世の中で、西洋流など云ふことは假初にも通用しない。俗に云ふ鼻擱みの世の中に、唯ペルリ渡來の一條が人心を動かして、「砲術だけは西洋流儀にしなければならぬ」と、云はゞ一線の血路が開けて、ソコで砲術修業の願書で穩に事が濟んだのです。(福翁自傳)

右のいきさつが事實であるとすれば、當時の福澤は、明らかに、砲術や醫術の限界を越えた、蘭學といふ語の現はす西洋の學問一般に漠然たる魅力を感じはじめてゐたらしい。これは緒方塾の學問が、醫術修得の基礎に、物理學や化學の學習を重視する風のあつたことに由來するところがあるらしく、それにしても、蘭學に觸れて三年目、すでに福澤の洋學觀は、原書の何たるかに無智であつた頃から、こゝまで成長してゐたとみえる。しかし、翻つて漢學をも含めた福澤の學問的素養を全體としてみると、福澤の漢學學習の出發が普通の子供より數年遅く、十四、五歳から始めたとはいへ、稀れにみる能力を以て、多數の漢籍を讀習し、蘭學を開始した二十一歳頃には、すでに漢學者の前座位は勤めることができるほどの素養をもち、殊に左傳が得意で、全十五卷を凡そ十一回も讀み返し、面白い處は暗記してゐたといふ福澤の學問的嗜好から判斷すると、けだし福澤の洋學觀の著しい成長振りと方向も當然のことと考へられる。しかも、緒方塾の勉學の空氣には、このやうな福澤の學問的傾向を更に一般と助長するものがあつたらしい。

其時の有様を申せば、江戸に居た書生が折節大阪に来て學ぶ者はあつたけれども、大阪から態々江戸に學びに行く
と云ふものはない。行けば則ち教へると云ふ方であつた。左れば大阪に限て日本國中粒選のエライ書生の居やう譯
けはない。又江戸に限て日本國中の鈍い書生ばかり居やう譯けはない。然るに何故ソレが違ふかと云ふことに就て
は考へなくてはならぬ。勿論其時には私なども大阪の書生がエライ／＼と自慢をして居たけれども、夫れは人物の
相違ではない。江戸と大阪と自から事情が違て居る。江戸の方では開國初めとは云いながら、幕府を始め諸藩大名の
屋敷と云ふ者があつて、西洋の新技術を求むることが廣く且つ急である。從て聊かでも洋書を解すことの出来る者
を雇ふとか、或は翻譯をさせれば其返禮に金を與へるとか云ふやうな事で、書生輩が自から生計の道に近い。極都
合の宜い者になれば大名に抱へられて、昨日までの書生が今日は何百石の侍になつたと云ふことも稀にはあつた。
夫れに引換て大阪は丸で町人の世界で、何も武家と云ふものはない。從て砲術を遣らうと云ふ者もなければ原書を
取調べやうと云ふ者もありはせぬ。夫れゆる緒方の書生が幾年勉強して何程エライ學者になつても、頓と實際の仕
事に縁がない。即ち衣食に縁がない。縁がないから縁を求めると云ふことにも思ひ寄らぬので、然らば何の爲めに
苦學するかと云へば一寸と説明はない。前途自分の身體は如何なるであらうかと考へた事もなければ、名を求める
氣もない。名を求めるところか、蘭學書生と云へば世間に悪く云はれるばかりで、既に已に焼けに成て居る。唯晝
夜苦しんで六かしい原書を読んで面白がつて居るやうなもので實に譯けの分らぬ身の有様……〔福翁自傳〕
江戸のやうな武家社會から解放され、さうかと云つて、大阪のやうな町人社會からは、悪く云はれるだけで、その社
會からも超然としてゐる。このやうな解放された自由な學問意識が、自身にも「一寸と説明しやうのない」かたちで、

こゝに把まれてゐるのは興味がある。福澤がこの學問意識の内側を次のやうに、描寫してゐるのはみのがしえない。

一步を進めて當時の書生の心の底を叩いて見れば、自から楽しみがある。之を一言すれば、——西洋日進の書を讀むことは日本國中の人に出来ない事だ、自分達の仲間に限て斯様な事が出来る、貧乏をしても難澁をしても、粗衣粗食、一見見る影もない貧書生でありながら、智力思想の活潑高尚なることは三侯貴人も眼下に見下すと云ふ氣位で、唯六かしければ面白い、苦中有樂、苦即樂と云ふ境遇であつたと思はれる。喩へば此藥は何に利くか知らぬけれども、自分達より外にこんな苦い藥を能く吞む者はなからうと云ふ見識で、病の在る所も問はずに唯苦ければもつと吞で遣ると云ふ位の血氣であつたに違ひはない。若しも眞實その苦學の目的如何なんて問ふ者あるも、返答は唯漠然たる議論ばかり。醫師の塾であるから政治論は餘り流行せず、國の開鎖論を云へば固より開國なれども、甚だしく之を争ふ者もなく、唯當の敵は漢法醫で、醫者が憎ければ儒者までも憎くなつて、何でも蚊でも支那流は一切打拂ひと云ふことは何處となく定まつて居たやうだ。(中略)「今に見ろ、彼奴等を根絶やしにして呼吸の音を止めて遣るから」なんてワイ／＼云たのは毎度の事であるが、是れとても此方に如斯と云ふ成算も何もない。唯漢法醫流の無學無術を罵倒して蘭學生の氣焰を吐くばかりの事である。兎に角に當時緒方の書生は十中の七八、目的なしに苦學した者であるが、其目的のなかつたのが却て仕合で、江戸の書生よりも能く勉強が出来たのであらう。

〔福翁自傳〕

かつて大阪には、富永仲基などにみられるやうな批判的な學問の起つたこともあるが、それは享保頃までのことで、その後絶えてなかつたのに、幕末の大阪の地に、かゝる學問意識が存在しえたのは、近世的限界から脱けようとして脱

け切れずにゐた町人社會が、これを要求し、これを成長させたからではなくて、たゞ、江戸の武家社會とは異つて、直接このやうな學問に關心を強く示さず、その無理解と無關心とが却つて、このやうな學問意識の發生に幸したといふ程度のもではなからうか。そこに見出される學問意識は、芽生えのかたちであるが、すでに近世武家の世界をも、近世町人の社會をも乗り超えてゆかうとする要求をもち、「しかと云ふ成算は何もなく」とも、近世教學に對してこれを打破しようといふ意欲をかなり強くもつてゐたらしい。右の福澤の追憶に語られてゐる事實といふよりはむしろ、そこに流れる氣分そのものから、汲みとることのできるのは、過去や現在を乗り超えて、未來を夢みる當時の蘭學書生の一見奔放ともいふべき學問意識である。しかも、それと同時にみのがしえないのは、學術の基礎學として、物理化學を尊重する緒方塾の學風のうちに育てられた福澤が、西洋風の格物致知といふことの眞義を、この頃充分に身につけて、數理を以て自然をも人生をも究めつくしうるといふ、後年までもちつゞけた學問觀の基礎を培つたことである。

大阪に居て、右様の自由な學問的雰圍氣の裡に、苦學はしながらものびくと勉學してゐた二十五歳の福澤は、安政五年十月、突然藩から呼び出しをうけて、全く違つた江戸の學問的空氣の中へ飛び込む運命となつた。その上小さいながらもとにかく一私塾の主となつた。しかし、初めにも述べたやうに、この私塾開設には、福澤自身が積極的に自分から働きかけた形跡がみられない。さういふ資料がみあたらない。だから、大阪勉學中、福澤がいてゐた右様の學問意識の中から、福澤塾が直接生れてきたのであるとは云ひ切ることができない。

福澤塾の中で、福澤のもつ學問意識が活潑に働くやうになるには、どのやうな經過を辿つたのであらうか。これが次に來る問題である。

福澤は江戸へ出てから、それ以前とは、見違へるほど、自己の生涯の轉期に當つて、外面的にみて、自主的になつてゐる。福澤の學問的生涯を振り返つてみると、十四、五歳ではじめて正式に師に就いて學問を始めようと、自らその氣になつたのが、唯一の例外で、

藩の風で幼少の時から論語を讀むとか大學を讀む位の事は遣らぬことはないけれども、獎勵するものとしては一人もない。殊に誰だつて本を讀むことの好きな子供はない。私一人本が嫌ひと云ふこともなからう、天下の子供はみな嫌ひだらう。私は甚だ嫌ひであつたから休でばかり居て何もしない。手習もしなければ本も讀まない。根ツから何にもせずに居た所が、十四か十五になつて見ると、近所に知て居る者は皆な本を讀で居るのに、自分獨り讀まぬと云ふのは外聞が悪いとか耻かしいとか思つたのでせう。夫れから自分で本當に讀む氣になつて、田舎の塾へ行始めました。(福翁自傳)

と云つてゐるが、この時以外には、福澤は長崎へ砲術修業に出る時にも、大阪に止つて勉學を續ける際にも、いつも兄三之助の意見に隨つてゐる。生後一年半で父を失つた福澤にとつて、八歳年長の當主の兄は、父の面影を偲ぶ唯一の人であつたであらう。父と兄とについて、福澤の書いたものをみると、目立つて人懐しさに堪えないやうな情感の行間に流れてゐるのを見のがしえない。父と兄とは性格が似てゐるばかりでなく、學統も三浦梅園の流を汲むとともに、堀川の學徳の高いことを尊ぶ學風を思慕してゐる。しかも、兄三之助は梅園流に數學の價値を大いに認めてゐたいはれる位

であるから、年少にして一家の當主となつて、自由を或程度束縛されなかつたら、また、父さへ生存してゐてくれたら、恐らく彼自身が蘭學の價值を認めて、その世界に飛び込みたい位の欲求を、胸中に燃やしたのではあるまいか。二十一歳の弟諭吉に對つて、蘭書の學習を勧誘した彼の心の内は、滿されない自分の要求を、部屋住みの身分の弟に代つて満してもらひ度い氣持であつたのではなからうか。前に引用した兄弟の會話に流れる氣分のうちにも、このやうな三之助の心境を讀みとることができる。一方また、兄の勧誘をうけた福澤も、打てば響く底のうけこたへをしてゐる。兄の掛聲に對して直ぐ立ち上るだけの十二分の準備が、すでに福澤の側にもでき上つてゐたらしい。緒方塾入門の際にも、「大阪でも先生がありさうなものぢや」と云つた兄の言葉は、無造作のうちにも、當時の洋學界の形勢に照してみると、一見識を藏してゐるものといはざるをえない。この兄の一言で江戸行きの決心を翻した福澤が、大阪で搜し出した先生が、緒方洪庵であつたといふ一事は、わが國における洋學の中核的學統と福澤との結縁を成立させたことになる。學統の上からみると、福澤は、青木、前野、杉田、大槻、宇田川の流れを汲む坪井玄道門下の緒方に就いて學んだのであるから、洋學正系の一人となつたわけである。

必然と偶然と自由との三つの契機の織り成すところ、そこに歴史の動向が決定されるといふが、それらを見分けることは容易に出来る業ではない。しかし、そこに歴史の動く機縁があることは動かしがたいやうである。長崎から大阪へと道をとつた福澤の蘭學修業のコースは、安政五年、更に東への途を進んで江戸へ下ることになつた。此度は、二年前すでに、兄は亡くなつてゐなかつたが、岡見の發意によつて、福澤は洋學者の一人として、幕末日本の學問の中心地江戸に身を置く運命となつた。福澤が勉強してゐた頃が、幕末洋學界における大阪の全盛期で、江戸のそれに拮抗してゐた

が、安政をすぎて萬延・文久と幕末も終り近くなると、有名な洋學者は幕府や諸藩の引きもあつてか、江戸に集中する氣運に向ふ。緒方洪庵の如きも、文久二年には、幕府に江戸へ召されて將軍の侍醫となり、兼ねて醫學所の頭取に擢でられてしまふ。それであるから、福澤が江戸に下つた安政五年頃が、その氣運轉換の潮時であつたとみえる。全國有數の洋學者の集る江戸で、福澤は一小私塾の主として弟子の教育に従事するとともに、自身の勉強をつゞけることになつた。江戸へ出た當初、福澤は洋學者仲間や先輩の學力を試みてゐるが、恐らくそれは直接他を知り度いといふよりも、自分の力の程度を知りたかつたからであらう。

ところが、開塾の翌年、開港直後の横濱の勢況を見物に行き、心機一轉、英學に轉向を自ら決意したについては、福澤の學問、延いては福澤塾の學問にとつて、重大な意義がある。福澤が横濱で見たものは、この極東の島國に押寄せてきてゐた西力東漸の現實のすがたであつた。東洋の果ての、小さな島國の開かれたばかりの港街に、みいだされる英帝國の實力の具現であつた。印度のことは、いふまでもなく、三十年前に隣國シナに起つた阿片戰爭のことは、當時の日本人にも、限られたルートを通してではあつたが、かなり詳細に報道され、異常な驚きを與へてゐた。西力東漸の先頭に立つものが英國であり、そのまた英國の活動を助けてゐる圓滑油が英語であることを、福澤は既に知つてゐた。福澤は横濱でそれを實見したのである。福澤は横濱の街の所々にみる英語らしい讀めない文字を通して、ちやうど、のぞきからくりの窓から、中の影像を窺ふやうに、國際競争場裡の縮圖をのぞきみたやうな氣がした。「今世界に英語の普通に行はれて居ると云ふことは豫て知て居る（中略）今我國は條約を結んで開けかゝつて居る。左すれば、此後は英語が必要になるに違ひない。洋學者として英語を知らなければ迎も何にも通ずることが出来ない。此後は英語を讀むより外

に仕方がない」と福澤は考へた。そこで、「横濱から歸た翌日だ、一度は落膽したが同時に又新に志を發して、夫れから以來は一切英語と覺悟を極め」(「福翁自傳」)た。英學者福澤は、このやうな次第で、一日の横濱見物といふ遇然の機會から誕生した。しかし、それは、むしろ福澤自身の現實直觀による思ひ切つた決斷そのものから生れてきたものと判斷せねばならぬ。當時英學は殆ど未開拓の世界であつた。英學界と呼びうるほどのものは存在しなかつた。文化五年(一八〇八年)のフェートン號事件が幕末英學への關心を惹起したはじまりともいへるが、その頃の研究は通辭の間に限られ、嘉永二年(一八四九年)長崎に來た米人マクドナルドの門下からはじめて、森山多吉郎堀達之助の如きが出て、ペルリ渡來の際に、米國歸りの中濱萬次郎とともに活躍した。英學はこの頃から、漸く人々の氣を引くやうになつていつた。福澤の英學轉向も、この氣運の波に乗つたものにほかならない。したがつて、福澤の英語學習は蘭學の場合にくらべて、實に茨の道を行くの觀があつた。當時幕府に徵用されてゐた森山について、英語の教授をうけようとして、森山の多忙のために不能、獨學を決心して、わざ／＼蕃書調所に入門の手續までし、英蘭對譯の字書を貸り出さうとして、これも失敗、藩の金五兩で、ホルトップの英蘭對譯發音辭書一部二冊を買ひとつてもらひ、手に入れたのはよいとして、研究仲間を探し求めて、以前に英語學習に手をつけたことのあるらしい神田孝平には、苦勞多い故を以て斷られ、村田藏六(後に大村益次郎)には無益、無要、蘭譯で事足りると、頭から反對され、結局原田敬策一人の賛成を得て、二人でやり始める。一番困難な發音は、長崎から來た子供や漂流人に教はる、といふ案配で、苦心慘愴、從來習ひ覺えた蘭語の力が案外に役に立つて、ようやく英語研究に目鼻がついて行つたらしい。未開拓の英學界を切り開いてゆく福澤の姿を右は如實に示してゐる。この頃から福澤は、兄や岡見の如き、他人のイニシアチブによつては動かされず、自己の決斷

によつて、自己の運命を開拓してゆくやうにみえる。英語研究への轉向の事件はその皮切りであつたらしい。

福澤の學問意識を飛躍的に展開させた機會は、その後八、九年ほどの間に起つた三回に及ぶ外國行きであつた。英學轉向で自己の運命を自己の決意で開拓するといふ、一本立の第一歩を踏み出した福澤は、洋學界の先輩桂川を介して、面識もない軍艦奉行木村攝津守に直々外國行きの伴を依頼するといふ思ひ切つたことをして、西洋實地見聞の機會を獲、英語といふ最上の道具を用ひて、西洋の事物を自己の耳目を以て研究する端緒をつかんだ。萬延、文久、慶應の三回の外國行きは、三回とも、それぞれ違つた意味で、福澤の學問意識の展開に役立つた。

第一回の米國行きは、萬延元年一月から五月に亘つての旅であつたが、米國の地に居つたのは凡そ二ヶ月足らずで、その間福澤の見聞した米國文明については、日本で多少習ひ覺えてゐた物理化學方面のことについては、驚かなかつたが、「社會上、政治上、經濟上の事は一向分らなかつた」らしく、みるもの聞くもの、「途方もない事だ」と思つたり、「大に膽を潰した」り、「唯可笑しくて堪らな」かつたり、「随分苦勞であつた」り、「少しも分らな」かつたり、「どうも不思議だ」、「呆れた話だ」と思つたり、「大きに感心した」りしたと述懐してゐる。「福翁自傳」このやうな、制度風習の違ひからくる驚嘆の洗禮をうけた福澤の學問意識は、その後一年半を経て、文久元年十月から同二年十二月に亘る一年餘の歐洲旅行の際には、見違へるほどの成長振りを示してゐる。

私の歐羅巴巡回中の胸算は、凡そ書籍上で調べられる事は日本に居ても原書を讀で分らぬ處は字引を引て調べさへすれば分らぬ事はないが、外國の人に一番分り易い事で殆んど字引にも載せないと云ふやうな事が此方では一番六かしい。だから原書を調べてソレで分らないと云ふ事だけを此逗留中に調べて置きたいものだと思つて、此方向で以

て是れは相當な人だと思へば其人に就て調べると云ふことに力を盡して、聞くに従て一寸々々(中略)記して置く……〔福翁自傳〕

右は當時、福澤の學問の志向が、社會上、政治上、經濟上等の方面に向つてゐたことを如實に物語ると同時に、歐州旅行中における西洋文明研究の要領乃至心構へを示してゐる。恐らく福澤は、かつて物理書等で習得した物の見方や考へ方と、同じ見方や考へ方を、この旅行中に、社會政治經濟等の事象の研究に當てはめてみることを學びとつたのではなからうか。

「凡そ理化學、器械學の事に於て、或はエレキトルの事、蒸氣の事、印刷の事、諸工業製作の事などは必ずしも一々聞かなくても宜しいと云ふのは、元來私が専門學者ではなし、聞た所が眞實深い意味の分る譯けはない。唯一通りの話を聞くばかり、一通りの事なら自分で原書を調べて容易に分るから、コンナ事の詮索は先づ二の次にして、外に知りたいたことが澤山ある。例へばコ、に病院と云ふものがある。所で其入費の金はどんな鹽梅にして誰が出して居るのか、又銀行と云ふものがあつて其金の支出入は如何して居るか、郵便法が行はれて居て其法は如何云ふ趣向にしてあるのか、佛蘭西では徵兵令を厲行して居るが、英吉利には徵兵令がないと云ふ其徵兵令と云ふのは、抑も如何云ふ趣向にしてあるのか、其邊の事情が頓と分らない。ソレカラ又政治上の選舉法と云ふやうな事が皆無分らない。分らないから選舉法とは如何な法律で議院とは如何な役所かと尋ねると、彼方の人は只笑て居る。何を聞くのか分り切た事だと云ふ様な譯。ソレが此方では分らなくてどうにも始末が付かない。又黨派には保守黨と自由黨と徒黨のやうな者があつて、双方負けず劣らず鎬を削て争ふて居ると云ふ。何の事だ、太平無事の天下に政治上

の喧嘩をして居ると云ふ。サア分らない。コリヤ大變なことだ。何をして居るのか知らん。少しも考の付かう筈がい。彼の人と此の人とは敵だなんと云ふて、同じテーブルで酒を飲で飯を喰て居る。少しも分らない。ソレが略分るやうにならうと云ふまでには骨の折れた話で、其謂れ因縁が少しづつ分るやうになつて來て、入組んだ事柄になると五日も十日も掛てヤット胸に落ると云ふやうな譯で、ソレが今度の洋行の利益でした。(「福翁自傳」)

ここにおいて、福澤の學問意識に大きな革命が起つたであらうことは推察するに難くない。五日も十日もかゝつて、漸く胸に落るといふやうな學問意識の轉換は、どういふ通路によつて成就したかといふに、理解しがたい「趣向」や「謂れ因縁」や「入組んだ事柄」を解きほぐすには、恐らく、物理學などの教へるもの見方や考へ方、數理による思考の方法が媒介となつたのではなからうか。既に第一回の米國行きで、西洋文明のうち、政治上、社會上、經濟上の事柄に對する驚異の洗禮をうけて開かれてゐた福澤の眼は、十九世紀も半過ぎた歐洲の精神文明の趣向、因縁、仕組の本質を見ぬくために、日本で修得した物理學的思考方法を適應したであらうことは最も自然のやうに思はれる。歐洲旅行で獲た見聞を基に、歸朝後著はされた「西洋事情」の構成をみると、その間の事情が分るやうな氣もするし、また、バックルを福澤が讀んだのは、明治に入つてからであらうが、社會事象は自然現象と同じく狂ひのない法則によつて動いてゐることを説くバックルに、福澤が共鳴するやうになる素地は、すでにここに見出されるやうに思はれる。明治九年三月、福澤は自ら起草した「慶應義塾改革の議案」の中で、學問を有形無形の二つに大別し、勉學の順序を、「有形學及び數學より始む。地學、窮理學、化學、算術等、是なり。次で史學、經濟學、修身學等、諸科の理學に至る可し。何等の事故あるも此順序を誤る可からず」と規定して居り、東西學問の差異の分れるところは學問の根據に物理學を置

くか置かぬかにあるとみ、「我が慶應義塾に於て初學を導くに専ら物理學を以てし、恰も諸學の豫備と爲す」といふ、福澤の後年の學問觀は、すでにこの歐洲行きの頃に、その基本的な形を探りはじめてゐたとみることが出来る。學問といふ枠の内では、自然と人生とは數理の一線において連續してゐるといふ考へを、福澤は晩年になつても持ちつゞけてゐるが、このやうな學問意識の確立した機縁は、大阪緒方塾における勉學の素地の上に築かれた、第一回の米國行きの際の西洋文明に對する開眼と、歐洲行きの時の實地研究であるともみてよからう。

福澤は數理の尺度を用ゐて、これを自然界の探究から人間界の研究に押し及ぼしたのであるが、このことの容易な業でなかつたことは想像の外であつたらしい。歐洲行きの前に、日本に在つて、

英書中にダイレクトタキス、インダイレクトタキス（直接税、間接税の事なり）の語を見て少しも分らずダイレクトは直達の義にして之にインなる打消しを冠すれば不直達の義なり、夫れまでは解す可きなれども税に直達不直達とは何のことやら種々様々の辭書を調べても曾て註解したるもなく先輩老成の學者に質問しても終に説明を得たることなし左れば横濱居留の外國人に聞かんとするも幕府の成規甚だ煩はしく内外人相互に文通さへ六かしき有様なれば書生が文事の不審を質問するなど迎も叶ぬことにして當時吾々讀書生の不如意推して知る可し（「福澤全集緒

言」)

日本に居る時、このやうな不如意を託つてゐた福澤は、歐洲旅行中にも、依然として、不自由の延長を経験したらし

5。

唯こゝに一つ可笑しいと云ふのは、日本は其時丸で鎖國の世の中で、外國に居ながら兎角外國人に遇ふことを止め

やうとするのが可笑しい。使節は竹内、松平、京極の三使節、その中に京極は御目附と云ふ役目で、ソレには又相應の屬官が幾人も附て居る。ソレが一切の同行人を目ッ張子で見居るので、なか／＼外國人に遇ふことが六かし。同行者は何れも幕府の役人連で、其中に先づ同志同感、互に目的を共にすると云ふのは箕作秋坪と松木弘安と私と、此三人は年來の學友で互に往來して居たので、彼方に居ても此三人だけは自然別なものにならぬ。何でも有らん限りの物を見やうと許りして居る。ソレが役人連の目に面白くないと見え、殊に三人とも陪臣で、然かも洋書を讀むと云ふから中々油斷をしない。何か見物に出掛けやうとすると必ず御目附方の下役が附いて行かなければならぬと云ふ御定まりで、始終附て廻る。此方は因より密賣しやうではなし、國の秘密を洩らす氣違ひもないが、妙な役人が附て來れば只蒼蠅い。蒼蠅いのはマダ宜いが、其下役が何か外に差支があると、私共も出ることが出來ない。ソレは甚だ不自由でした。私は其時に——是れはマア何の事はない。日本の鎖國を其のまゝ擔いで來て、歐羅巴各國を巡回するやうなものだと云て、三人で笑たことがあります。ソレでも私共は見やうと思ふものは見、聞かうと思ふ事は聞た。……〔福翁自傳〕

内に居つても、外に在つても、いつもつきまとふ不如意、不自由を笑ひとばして、見ようと思ふものは見、聞かうと思ふものは聞いて廻つた一年に亘る佛、英、蘭、李、露、葡等の視察は、けだし福澤の學問に測り知れない收獲をもたらしたであらう。制度文物のうち、これは奇なり妙なりと思へば、「無理に客を引留めて全體の次第柄を聞けども其日は要領を得ずして相分れ、翌日は此方より客の家に出掛けて不審の残りを質問し、尙合點行かずして重ねて訪問する等凡そ時を費すこと三四日にして始めて腹に落ちて成程旨い（中略）」と獨り感心するまで、徹底的に見聞して廻つたら

しい。この徹底した見聞を歸朝後「取纏め又横文の諸書を参考して著述した」ものが「西洋事情」であるが、福澤の學問意識をうかゞひうる最初の主要な著譯書といふべきこの書のねらひは、初編卷之一の小引の劈頭の文字によつて十二分に表明されてゐる。

洋籍の我邦に舶來するや日既に久し其翻譯を経るもの亦尠からず然して窮理地理兵法航海術等の諸學日に闢け月に明にして我文明の治を助け武備の闕を補ふもの其益豈亦大ならずや然りと雖ども余竊に謂らく獨り洋外の文學技藝を講窮するのみにて其各國の政治風俗如何を詳にせざれば假令ひ其學藝を得たりとも、其經國の本に反らざるを以て晉に實用に益なきのみならず却て害を招んも亦計るべからず抑も各國の政治風俗を觀るには其歴史を讀むに若くものなし然れども世人夫の地理以下の諸學に於て其速成を欲するが爲めに或は之を讀むもの甚稀なり實に學者の缺典と云ふべし（「西洋事情」）

經國の本に反らざる如何なる學藝の修得も、實用に有害無益なりと説く、福澤の實學思想の最初の表現をこゝに見出す。しかも、この本を得るの學習法として歴史の一科を挙げ、當時の洋學者のこれを輕視する傾きあるを指摘してその缺典なりと云つてゐるが、この歴史重視の傾向はけだし、渡歐によつて初めて生れたものでなく、福澤の少年時代における漢學學習の際にも既に現はれてゐたもので、白石常人の塾において、論孟は勿論、蒙求、世説、左傳、戰國策、老子、莊子などの講義、並びに、先生が好きだと見えて詩經と書經との講義を十分に受けた福澤は、「其先きは私獨りの勉強、歴史は史記を始め前後漢書、晉書、五代史、元明史略と云ふやうなものを讀み、殊に私は左傳が得意で、大概の書生は左傳十五卷の内三四卷で仕舞ふのを、私は全部通讀、凡そ十一度び讀み返して、面白い處は暗記して居た」と

「自傳」に吹聴してゐるのを以ても知られるやうに、この傾向は、生來のものか、漢學傳來の風潮の一面によつて、年少の頃培はれたものであるらしい。

しかし、それが歐米の文物制度の實地研究によつて一段と掻き立てられ、更に新しい廣い未知の領域の開拓にむかつて驀進したことはみのがしえない。その際あたかも騎馬の如き役目を果したらしいのが、日本において既習してゐた數理的なものゝ見方考へ方であつたと考へられる。このやうにして、二回の外國行きが、福澤の學問意識に、蘭學修業時代に獲た數理的思考法の基底の上に、大きな廣がり、豊かな内容とを與へたものゝやうである。

以上によつて、歐米視察が福澤の學問意識に轉期をもたらしたことを知るとともに、慶應義塾の學問と教育にも、大きな變化を與へたであらうと想像するのは自然なことである。ところが、「馬場辰猪自傳」によると、慶應二年入塾後の模様を語る一節に、當時「歴史、哲學、政治學の書物に至つては何處にもなかつた」とあるのは、明らかにこの豫想到に反する。若し、馬場の記憶に誤りがないとすれば、この食ひ違ひはどこからくるのであらうか。種々考案してみても、時勢のさせた業であると判斷するのが最も妥當のやうに思はれる。福澤は遅くも萬延の頃からは、その座右に、外遊中購入したか、日本で手に入れたかして、歴史、經濟、社會方面の書をなほどこか私藏してゐたらしい。しからば、なぜ、これらの書が塾生の學習の用に供せられなかつたのであらうか。殊に、文久二年の暮に、歐洲から歸朝して後は、慶應二年冬の「西洋事情」初篇の發兌まで、専心調査研究に没頭して幾つかの原書を讀んでゐる筈だ。「西洋事情」の内容は歐洲旅行中の見聞を整理したものに、歸朝後經濟書等の諸書からの所引を加へて編輯したもので、「英亞開版の歴史地理誌數本を閲し、中に就いて西洋列國の條を抄譯し、毎條必ず其要を掲げて、史記、政治、海陸軍、錢貨出納の四目と

なし、即ち、史記以て時勢の沿革を顯はし政治以て國體の得失を明にし海陸軍以て武備の強弱を知り錢貨出納以て政府の貧富を示す」(「西洋事情」)ものが主たる部分で、備考として、西洋一般普通の制度風俗の大概を列擧してある。これを以てても、文久三年以後の鐵砲洲時代に、歴史、政治、經濟等の書が福澤の手許にあつたことは確かで、有つてしかも、塾生に讀ませなかつたことは、不可解である。それが時勢のせいではなからうかといふのは、「西洋事情」そのものが、序文には「三月より公務の暇に業を起し、六月下旬に至り、初篇初めて稿を脱せり」とあつて、慶應二年冬の發兌であるが、早くから、稿本が一部の人々に流布されてゐたらしいところから判斷して、恐らく慶應二年以前に既に一應書き上げられてゐたと推定されて居り、その出版のたくも遅れた理由として、當時かゝる書物の出版の危険を福澤が感じてゐた爲めであらう、といふ推察ができるからである。(高橋誠一郎「福澤諭吉」)若しこの推察が是認されるとすれば、慶應四年以前の福澤塾で、歴史、政治、經濟等の書の讀まれなかつた理由も納得できる。文久三年八月十八日の政變前の尊攘論極盛を頂點として、前後の數年間は洋學者の最も驚怖すべき期間であつた。歐米から歸朝後の福澤が、萬延元年に「華英通語」一巻を出版したきり、慶應二年の冬まで、鳴かず飛ばすでゐたのも、研究調査に暇どつてゐたり、公務多忙の故もあつたであらうが、むしろ、時勢が福澤にそれを強ひたのであつて、福澤と一緒に遣歐使節に隨行した通辨の福地源一郎の「懷往事談」によると、文久二年の冬、歐洲から歸つた通辨及び翻譯方は日本に歸つて後、大いにお役に立つこともあらうと、「其時に臨みて、御答振りに差支へては相成らず、兼ねて巡回中、朝夕、筆まめに西洋の事情を書き留めて置いたが、歸つてみれば、攘夷論が盛んで、閣老參政は愚か、誰一人海外の事情を問ふものなく、却つて奉行から、海外の事どもを猥りに口外すべからずといふ内訓を受けて、甚だ失望落膽した、といふことが記

されてゐるのを以ても、これを裏付けることができよう。(高橋誠一郎「福澤諭吉」)

このやうな時勢の制約を受けながらも、慶應義塾は、英學塾として、この期間に順調な發展をとけてゐる。文久・慶應と年の進むにつれて、英學は他の佛學、獨學に比べて格段の隆盛をみせてゐる。一例を挙げれば、文久二年十二月頃の洋書調所における諸科の稽古人百人ほどの内英學の者は六七十人であつたが、三年後の慶應二年には、稽古人が英學だけで百五十人餘に殖え、佛學が六十人を數へてゐる。(大久保利謙「日本の大學」)「慶應義塾五十年史」所載の入學者數によれば、文久三年十、元治元年三十六、慶應元年五十八、同二年七十七、同年八十四、となつて居り、その進展振りをうかゞふことができる。「馬場辰猪が十七歳のとき(慶應二年)英學を學ぼうとして江戸に出で、鐵砲洲奥平邸に行つて、門番に、英語を教へるのはどこだと尋ねたところ、門番は知らなかつたので、蘭學所はと聞き直して初めてわかつた」(「福澤諭吉傳」第一卷)といふ話が傳つてゐるが、當時邸内などでは依然として、「蘭學塾」で通つてゐたとしても、その道のものには、福澤塾は英學を教へる江戸有數の私塾としてその名を知られてゐたらしいことがこの話からも察せられる。

このやうに見てくると、時代の大きな動きの一面が、福澤に研究の發表を差控へさせ、塾内で政治や經濟の書を學習することを遠慮させるとともに、時勢の他面は福澤をして社會上、政治上等の事柄を専心調査研究させ、英學塾としての福澤塾に入學者を増加させてゐたことを知る。要するに、この矛盾は時代が大きく轉換しようとしてゐたことを示してゐるのである。この大轉換が福澤の心境にどのやうな影をさしたか。そのまた心境が福澤の學問意識と塾の學問にどんな形で現はれていつたか。

蘭學修業によつて培はれたものゝ見方考へ方を以て、西洋の文物を研究し十分に成長した眼を轉じて、さて、わが日本の國情をながめた福澤には、左幕派も倒幕派ともに、儒教の精神に養はれた固陋な攘夷主義の空意張りするのみの連中と見えたらしい。當時來遊した日本最良の一米人すら、日本の實際を見て、「こんな根性の人民では氣の毒ながら自立は六かしい」と斷言してゐるを聞いて福澤は、次のやうに慨嘆してゐる。

其時の私の心事は實に淋しい有様で、(中略) 維新前後無茶苦茶の形勢を見て、迎も此有様では國の獨立は六かしい。他年一日外國人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ、左ればとて今日全國中の東西南北何れを見ても共に語る可き人はない。自分一人では勿論何事も出來ず亦その勇氣もない、實に情ない事であるが、いよく外人が手を出して、跋扈亂暴と云ふときには、自分は何とかして其禍を避けるとするも、行く先きの永い子供は可愛さうだ、一命に掛けても外國人の奴隸にはしたくない、或は耶蘇宗の坊主にして政事人事の外に獨立させては如何、自力自食して他人の厄介にならず、其身は宗教の坊主と云へば、自から辱しめを免かるゝこともあらんかと、自分に宗教の信心はなくして、子を思ふの心より坊主にしやうなどと種々無量に考へた。……(「福翁自傳」)

右は三十餘年後の追懷であるが、事實如何はとにかく、當年の福澤の心境の眞實を語るものといへよう。幕府も諸藩も頼りにならず、ともに語るべき人もなし、時勢は日に急迫してくる。

迎も是れは仕方がないと眞實落膽はしたけれども、左りとして自分は日本人なり、無爲にしては居られず、政治は兎も角も之を成行に任せて、自分は自分にて聊か身に覺えたる洋學を後進生に教へ、又根氣のあらん限り著書翻譯の事を勉めて、萬が一にも斯民を文明に導くの僥倖もあらんかと、便り少なくも身構へをした事である。(「福翁自傳」)

慶應明治の交りの頃の福澤の學問と、それから生れた數多くの著譯書、並びに新錢座における慶應義塾の成立とは、このやうな心境と身構と決意との産物にほかならない。慶應二年の冬の「西洋事情初篇」(三卷)の發兌を以て口火を切つた福澤の著譯書の公刊は、その年の内に「雷銃操法」(三卷)を出し、翌慶應三年には、「西洋旅案内」(二卷)、「西洋衣食住」(一卷)、「西洋事情外篇」(三卷)を生み、明治元年には「窮理圖解」(三卷)、「洋兵明鑑」(五卷)、「兵士懷中便覽」(一卷)が成り、明治二年には、「西洋事情二編」(四卷)、「清英交際始末」(一卷)、「英國議事院談」(二卷)、「世界國盡」(三卷)、「掌中萬國一覽」(一卷)を世に送り出させてゐる。これまさに、さきの福澤の心境の虚偽ならず、決意の強固であつたことを如實に示すものにほかならない。

新錢座の慶應義塾も、右の著譯と軌を一にして誕生した。「聊か身に覺えたる洋學を後進生に教へ」て、現在の失望の恢復を將來の日本に期待したらしい福澤が、その心にまづ思ひついたのは、志を同じくするよき協力者を養成することであつた。文久二年の十二月遣歐使節の一行とともに歸朝した福澤は、翌三年の秋頃、鐵砲洲へ移轉し、數十名の生徒を收容しうる見込を立てるとともに、更に翌元治元年三月には、中津から小幡兄弟を始め六名の青年を連れ歸り、これらを教育して將來のよき協力者に仕立てる心構へをしてゐる。學塾の基礎をきづくに第一に必要な人的要素の地かためを了へた福澤は、第二に、慶應二、三年頃における幕府の新政策樹立によつて、西洋の文物についての知識の需要が急に表て立つて増大して來た時勢の急轉回をいちはやく見てとつて、次々に著譯書を發表するとともに、塾生にも政治、經濟、歴史等の書を教授するの必要を痛感し、慶應三年一月から六月に亘る第二回渡米の際、塾の教科書として、歴史、經濟等の書を含めた多數の原書を購入して歸朝し塾教育の内容の充實に資した。第三には、著譯書の發行によつて獲た

多額の金を投じて、年毎に増大する入塾希望者に應ずる爲、新錢座に四百坪の土地を購入し、塾舎を新築し、續いてまた増築してゐる。このやうに、人的要素と教育内容と塾舎との三拍子を揃へた上で、福澤は現に自分が胸に懷いてゐるやうな學問に精進するにはそれはふさはしい學問的還境がなければならぬと考へて、西洋の「共立學校の制に倣ひ」塾全體を一つの會社組織とし、福澤自身も「僕は學校の先生にあらず、生徒は僕の門人にあらず、之を總稱して社中と名け、僕は社頭の職掌相勤め、讀書は勿論眠食の世話塵芥の始末まで周旋、其餘の社中にも各々其職分あり」(山口良藏宛書翰)と云つてゐるやうな、社中協力によつて維持する仕組の學塾を作り上げ、時の年號にちなんで假にこれを慶應義塾と稱し、「慶應義塾之記」といふ印刷物を配布して、天下にその學問と教育との主義精神を宣言した。時に慶應四年四月のことである。こゝに誕生した近代私學としての慶應義塾の構想は、洋學私塾としての福澤塾とは、その人的仕組において異るともに、私塾時代の學問の精神を發展的に引き繼いで、それを新時代にふさはしく展開させようとしてゐる如く見える。福澤はこの時自己の學問に對して強い自信をもつてゐたらしく、わが國における洋學百年の歴史の上に占める自己の地位を、時代の照明の下に明確に表明してゐる。

抑も洋學の由て興りし其始を尋るに、昔亨保の頃長崎の譯官某等、和蘭通市の便を計り、其國の書を讀習はんことを訴へしが、速に允可を賜りぬ。即ち我邦の人横行の文字を讀習るの始めなり。其後寶歴、明和の頃、青木昆陽、命を奉じて其學を首唱し、又前野蘭化、桂川甫周、杉田鷓齋等起り、專精して以て和蘭の學に志し、相與に切磋し、各得る所ありと雖も、洋學草昧の世なれば書籍甚だ乏しく、且之を學ぶに師友なければ、遠く長崎の譯官に就て其疑を叩き、偶々和蘭人に逢ば其實を質せり。蓋此人々、孰れも英邁卓絶の士なれば、只管自我作古の業にのみ心を

委ね、日夜研精し、寢食を忘るゝに至れり。或は傳ふ、蘭化翁長崎に往き和蘭語七百言を學得たりと。是に由りて古人力を用ふるの切なると其學の難きとを察すべし。其後大槻玄澤、宇田川槐園等繼起し、降て天保、弘化の際に至り、宇田川榛齋父子、坪井玄道、箕作阮甫、杉田成卿兄弟、及緒方洪庵等接踵輩出せり。是際や讀書譯文の法漸く開け諸家翻譯の書陸續世に出ると雖も、概ね和蘭の醫籍に止りて、旁ら其窮理、天文、地理、化學等の數科のみなれば、尙書籍の乏しきに論なく、總て修學の道甚便ならざれば、未だ隔靴の憾を免れず。然るに嘉永の季、亞美理駕人我に渡來し始めて和親貿易の盟約を結び、又好を英佛露等の諸國に通ぜしより、我邦の形勢終に一變し、世の士君子皆彼國の事情に通ずるの要務たるを知り、因て百般の學科一時に興り、各其學を首唱し、生徒を教育し、此に至りて始めて洋學の名起れり。是豈文學の一大進歩ならずや。顧ふに一事一運の將に開かんとするや、進むに必ず漸を以てす。譬へば猶樓閣に上るに皆級あるが如し。乃ち天保、弘化の際、蘭學の行はれしは、寶曆、明和の諸哲、これが初階を成し、方今の洋學の盛なるは、各國の通好に因ると雖も、實に天保、弘化の諸公之が次階を成せり。然則吾黨今日の盛際に遇ふも、古人の賜に非ざるを得んや。(「慶應義塾之記」)

わが國における洋學の傳統に對する福澤の見解が、右の文章に端的に表明されてゐる。福澤は自分の學問がその傳統の中から生れ出たことを認めるとともに、まさにその正嫡であることを宣言し、古人の努力を高く評價すると同時に、現在の自分達の學問がその傳統の頂點にあるといふ自信のほどを強く示してゐる。

福澤はこのやうに自分の學問を、わが國の洋學の傳統に明確に位置づけるとともに、明治維新といふわが國未曾有の爭亂期における洋學の占める役割と、洋學者の使命とを、干城の業とそれを事とする人々の使命との對比において、次

のやうに把握してゐる。

春來國事多端、遂に干戈を動かすに至り、帷幄の士は内に焦慮し、干役の兵は外に曝骨し、人情恟々、延て今日に至る。於是世の士君子、或は軍を投て戎軒を業とするあり、或は一書生たるを倦で百夫の長たんとするあり、或は農を廢して兵たる者あり、商を轉じて士たる者あり、士を去て商を營む者あり、事緒紛々、物論喋々、亦文事を顧るに遑あらず。嗚呼是革命の世に遁る可らざるの事變なる可きのみ。此際に當て獨我義塾同社の士、固く舊物を守て志業を變せず、其好む所の書を讀み、其尊む所の道を修め、日夜茲に講究し、起居常時に異ることなし、以て悠然世と相居て、遠近内外の新聞の如きもこれを聞くを好まず、唯自ら信じ、自樂み、其道を達するに汲々たれば、人亦これに告るに新聞を以てする者少く、世間の情態亦何様たるを知らず、社中自ら此塾を評して天下の一桃源と稱し、其景況全く世と相反するに似たり。(慶應四年七月「中元祝酒之記」)

次いで、維新革命に對處する、義塾社中の學問における心意氣を表明して、左のやうに述べてゐる。

然りと雖もよく事理を詳にし、其由る所、其安する所を視察せば、人各々其才に所長あり、其志に所好あり、所好は必ず長じ、所長は必ず好む。今天下の士君子、専ら世事に執掌し、干城の業を事とするも、或は止を得ざるに出づると雖も、自ら其所長所好なからざるを得ず。故に彼の士君子も、天與の自由を得て其素志を施すものと云ふ可し。又我黨の士、幽窓の下に居て、秋夜月光に講究すること舊日に異ることなきを得て、修心開知の道を樂み、私に濟世の一斑を達するは、豈天與の自由を得るものと云ざる可けんや。然らば則ち我輩の所業、其形は世情と相反するに似たりと雖も、其實は共に天道の法則に従て、天賦の才力を用ゆるの外ならざれば、此彼の間毫も戻ること

なし。(慶應四年七月「中元祝酒之記」)

福澤の見解によれば、維新争亂の時に當つて、干城の業を事とするも、幽窓の下讀書講究に専心するも、その才に長じ、その志に好む所にしたがつて、天與の自由を得るものといふ可く、彼此ともに、外觀は相反する如くにして、其實は天道の法則に従つて、天賦の才力を働かせてゐるわけであるから、兩者の間に優劣是非の別はないといふのである。我黨の士の使命は、たゞ修心開知の道を楽しみ、私に濟世の一斑に達しようとするところにあるのみ、といふのが、福澤の存意とみられる。

十有餘年以前、大阪の緒方塾の自由な學問的空氣の裡で、培はれた福澤の學問意識は、いまだ混沌として、將來の展開の素地を含みながらも、明確な形において自覺されてゐなかつたものゝやうであつた。安政五年の開塾後、十年を経た、慶應四年の今日において、はじめて、福澤の學問意識は右に舉げた「慶應義塾之記」並びに「中元祝酒之記」において、自覺的に把握され、廣く世に宣言されてゐる。慶應四年に「慶應義塾」の名稱の生れると、もに、慶應義塾の學問も、このやうに、自覺的に結晶し、はつきりと言葉の上に表明されるやうになつたといふことができる。こゝまでくると、慶應義塾は、福澤の學問意識そのものによつて成立してゐることが手にとるやうにわかる。それが、慶應義塾の學問と教育との上に、具體的にどんな形で現はれてゐるかを知らねば、慶應四年版並びに明治二年再版の「慶應義塾之記」の附録の日課表を見れば、當時福澤が懷いてゐた學問の姿を如實に見ることができし、明治二年八月の「慶應義塾新議」の一節「社中に入り先づ西洋のいろはを覚え、理學初歩歟又は文法書を読む、此間三ヶ月を費す。三ヶ月経て地理書又は窮理書一冊を読む、此間六ヶ月を費す。六ヶ月経て歴史一冊を読む、此間六ヶ月を費す」といふ記事を讀め

ば、義塾における勉學の順序の大略を知ることが出来る。明治九年の「慶應義塾改革の議案」の一節に示された讀書の順序、「有形學及び數學より始む。地學、窮理學、化學、算術等、是なり。次で史學、經濟學、修身學等、諸科の理學に至る可し。何等の事故あるも此順序を誤る可からず」といふ考への原型が、すでに此處に見出される。

三

福澤は二十一歳のとき、兄の勤めで蘭學修業を志すにいたつた自分の心境について、後年述懐し、「此時に洋書を讀みたるは何の目的を以てしたる歟、今に於て自ら解すこと能はず」と云ひ、「一時の遇然に出で」(明治十九年二月十八日「學生に對する演説の一節」)たるものゝやうに思ふとさへ語つてゐる。いふまでもなく、表向きは、砲術修業といふことであつたが、福澤の心中を割つてみれば、「抑も私の長崎に往たのは唯田舎の中津の窮屈なのが忌で、堪らぬから、文學でも武藝でも、何でも外に出ることが出来さへすれば難有いと云ふので」あつたらしい。これを以てみると、中津の封建的な空氣から解放されたいといふ福澤の願望が、福澤を洋學の世界に驅りやつたといふことになる。この述懐の眞實性はともかくとして、それが後年の追懷だけに却つて、そこに象徴的な意味があるやうに考へられて興味深い。福澤の學問が日本を封建制から解放し、個人の獨立心を培ふことを使命としてゐるかにみえるからである。

それともう一つ、指摘したいのは、福澤が蘭書を讀むことを勧められて、その氣になつたのについては、「當時横文字を讀むの業は、極めて六かしきことにして、容易に出来難き學問なりしが故に」敢えてこれを勉強してみようと決心した、と追懷してゐることである。當時の士風として、一般になにごとによらず、「唯出来難き事を好んで之に勤むる

の心」を武士たちがもつてゐた。この心は永年の練磨の結果武士の間に養成されてきたもので、福澤もその例にもれず、この心を培はれてゐたので、「或は洋學ならで、他に何か困難なる事業もありて、偶然に思ひ付きたらば、其方に身を委ねたるやも知るべからず」とさへ告白してゐる。この告白にも、なにか象徴的陰翳があるやうに思はれて興味がある。福澤の學問はたしかに日本國の獨立といふ、當時最も緊急にして困難な事業を、その課題として採り上げてゐるやうに考へられるからである。

右の追憶のうちに象徴的にみられる二つの課題は、たしかに福澤の學問意識を規制してゐるやうに考へられるが、この課題の解決の方途を、福澤は國民の「啓蒙」といふかたちにおいて、はつきり、自分の學問上に自覺した。内外情勢の行詰つた幕末の一時に、福澤は自分の陥つた絶望を打開するために、學問を以て教育と著述とに獻身する決意を固めてゐるのは、この國民「啓蒙」への學問的自覺の第一歩であり、慶應二年以降の著譯の矢繼ぎ早やの出版と、慶應義塾の目の醒めるやうな急速な擴充とは、この自覺の事實面への具現であり、「學問のすゝめ」の出版、殊にその第四編「學者の職分を論ず」(明治七年)の一文の發表は、福澤の學問による國民「啓蒙」の思想の深化と高揚とを意味する。福澤は右の第四編において、封建の遺習から國民を蟬脱させ國を獨立の安きにおくためには、學者はすべからず、政府の羈絆から脱け出し、どこまでも自由な立場に立つて、自己の「理性」を働かせなければならぬ、と説くのであるが、これはまさに、「啓蒙とは何か」(一七八)において、カントが、人類の啓蒙を成就するためには理性を公的に使用する自由が必要である、といつてゐるのに全く符合する。「理性を公的に使用することは、いかなる時でも自由でなければならぬ、かゝる使用のみが人類のうちに啓蒙を成就するのである。これに反して理性を私的に使用することは、時として制限せら

れてよい。そうしたからとて啓蒙の進歩は格別妨げられるわけではない。こゝに理性を公的に使用するといふのは、或人が學者として、一般の讀者全體の前で、自分自身の理性を使用することを指してゐる。また理性の私的な使用とは、公民として或る地位もしくは公職に任ぜられてゐる人が、その立場において自分の理性を使用することである。(「啓蒙か」岩波文庫 版、一〇頁)これは啓蒙の哲學者カントの意見であるが、福澤は、「今の世の學者、此國の獨立を助け成さんとするに當て、政府の範圍に入り官に在て事を爲すと、其範圍を脱して私立するとの利害得失を」考へて、自分は「私立に左袒」するものであるといつてゐる。兩者の間に、もし相異するところありとすれば、カントが人類の啓蒙を目指してゐるかみにみるのに對して、福澤の眼界は、國民の啓蒙と國の獨立の線に止まつてゐるかくの如くにみえる位であらう。

國民の啓蒙に、指導者としての學者の理性的公的な使用が不可欠であるとすれば、當時の情勢は全くこれに反するものがあつた。明治初年における國民の精神的指導者を一堂に集めた如き觀のあつた明六社同人の大半は政府の役人であり、福澤の「私立爲業」説に反對して、「在官爲務」を是認し辯護する人々であつた。(明六難誌 第二號)それ故、福澤は、「人民の氣風を一洗して世の文明を進むるには、今の洋學者流にも亦依頼す可ら」ず、また、「我國の文明を進めて其獨立を維持するは、獨り政府の能くする所に非ず」となし、これらの事業は、自由獨立な立場で物を考へ、それを口にし筆にすることのできる者にしてはじめて能く爲しうるところであるから、「必ず我輩の任ずる所にして、先づ我より事の端を開き、愚民の先驅を爲すのみならず、亦彼の洋學者流のために先驅して其向ふ所を示さざる可らず」と云ひ、驚くほどの自信を示してゐる。このやうな自信は、恐らく福澤の學問に對する自覺から出たものと考へられるが、その學問的確信から湧きでる勇氣の前には、當時の何人も眼をみはつたに違ひない。「今我輩の身分を考ふるに、其學識因より

淺劣なりと雖も、洋學に志すること日既に久しく、此國に在ては中人以上の地位にある者なり。輒近世の改革も、若し我輩の主として始めし事に非ざれば暗にこれを助け成したるものなり。或は助成の力なきも其改革は我輩の悦ぶ所なれば、世の人も亦我輩を目するに改革家流の名を以てすること必せり。既に改革家の名ありて、又其身は中人以上の地位に在り、世人或は我輩の所業を以て標的と爲す者ある可し。然ば則ち今人に先つて事を爲すは正にこれを我輩の任と云ふ可きなり。」(「學問のすゝめ」四編)

福澤の著譯書が右様な自信の所産であることは云ふまでもないが、慶應義塾も、まさに、それによつて成り、その上にしかと据ゑられた學塾であつたことをみのがしてはならない。このやうな學問的確信の上に立つた學塾が、尋常一様の體裁のものでなかつたことはみやすい道理である。慶應義塾は學者の學ぶところであり、學者を仕立るところである。福澤によると、世の學者は「文字を見る眼は中々慥にして、如何なる難文にても困る者なき」やうではあるが、しかし、「大概皆腰ぬけにて其氣力は不慥」である。慶應義塾では、氣力の慥な、腰のしつかりした學者を作りた、と福澤は念願してゐたらしい。なぜなれば、有形の文明は錢を以て買ふことができるが、文明の精神と云ふ可き、獨立の氣力は、これを他國から購ふことができないばかりでなく、この氣力がなくては、有形の文明も無用の長物に等しく、當年の我國獨立の薄弱なことを知れば知るほど、この氣力を培ふことの急務が痛感される。然るに、我國古來の國情をみるに、政府にも、一般庶民にも、この氣力をふるひおこして、文明を進展せしめるの一事を期待することができない。それは、何人にこれを期待しうるかといふに、福澤によれば、「國の文明は上政府より起る可らず、下小民より生ず可らず、必ず其中間より興て衆庶の向ふ所を示し、政府と并立て始めて成功を期す可き」(「學問のすゝめ」第五編)であるといひ、

この中間より興つて文明進展の原動力となるものを、福澤は社會の「ミツヅルカラス」の地位に居るところの學者に
おいて見出し、これに大なる期待をかけてゐる。然るに、わが國の學者の實狀をみると、「時勢に付き眼を着すること
高からざるか、或は國を患ること身を患るが如く切ならざるか、或は世の氣風に酔ひ只管政府に依頼して事を成す可き
ものと思ふか、概皆其地位に安んぜずして去て官途に赴き、些末の事務に奔走して徒に身心を勞し、其舉動笑ふ可きも
の多しと雖ども、自からこれを甘んじ人も亦これを怪まず、甚しきは野に遺賢なしと云てこれを悦ぶ者あり。固より時
勢の然らしむる所にて、其罪一個の人に在らずと雖ども、國の文明のためには一大災難と云ふ可し。文明を養ひ成す可
き任に當りたる學者にして、其精神の日に衰ふるを傍觀して之を患ふる者なきは、實に長大息す可きなり、亦痛笑す可
きなり」(「學問のすゝめ」五編)、といふ有様で、本來文明を首唱して、國の獨立を維持すべき學者がすこぶる頼りにな
らない。それでは、省みて、慶應義塾に學ぶ學者たちはどうであらうか。福澤は、明治七年の年頭に當り、義塾社中が
時の勢に徒らに押し流されることなきを自賛して、次のやうに述べてゐる。「獨り我慶應義塾社中は僅にこの災難を免
がれて、數年獨立の名を失はず、獨立の塾に居て獨立の氣を養ひ、其期する所は全國の獨立を維持するの一事に在り。
然りと雖ども、時勢の世を制するや其力急流の如く又大風の如し。此勢に激しく屹立するは因より易きに非ず、非常の
勇力あるに非ざれば、知らずして流れ、識らずして靡き、動もすれば其脚を失するの恐ある可し。抑も人の勇力は唯讀
書のみによつて得べきものに非ず。讀書は學問の術なり、學問は事をなすの術なり。實地に接して事に慣るゝに非ざれば
決して勇力を生ず可らず。我社中既に其術を得たる者は、貧苦を忍び艱難を冒して、其所得の知見を文明の事實に施さ
ざる可らず。其科は枚擧に遑あらず。商賣勤めざる可らず、法律識せざる可らず、工業起さざる可らず、農業勤めざる

可らず、著書譯術新聞の出版、凡そ文明の事件は盡く取て我私有と爲し、國民の先を爲して政府と相助け、官の力と私
の力と互に平均して一國全體の力を増し、彼の薄弱なる獨立を移して動かす可らざるの基礎に置き、外國と鋒を争て毫
も譲ることなく、今より數十年の新年を経て顧て今月今日の有様を回想し、今日の獨立を悦ばずして、却てこれを慙笑
するの勢に至るは、豈一大快事ならずや。學者宜しく其方向を定めて期する所ある可きなり。」(同上)

このやうにみてくると、明治初年における近代私學としての慶應義塾の結成とその存在理由とは、福澤の學問意識に
おける次の三つの契機に由來するものゝ如く考へられる。一つには、學問の目的を個人の獨立と國の獨立とに置き、前
者は後者の時間的には前段階、論理的には前提と考へる思想、二つには、日本の近代化の槓杆である啓蒙は、理性の公
的な使用に由らざれば成就せずといふ主張、三つには、社會の「ミッツルカラス」たる學者(高尚なる實學に従事す
る學究並に書生)を推進力として、日本の近代化を實現しようといふ意見、慶應義塾はこれら三つのものが一つに融合
したところに結成し、そこにまた、近代日本の成立にとつて、その存在理由を明確にうち出してゐる。

第一の問題について、福澤は「學問のすゝめ」では、「一身獨立して一國獨立す」といふ論理の運びを提起して、その
ナシヨナリズムの特質を表明してゐる。「文明論之概略」では、「國の獨立は目的なり、文明はこの目的を達するの手段
なり」といふかたちで、ナシヨナリズムの論理が展開してゐる。「今の我海陸軍を以て西洋諸國の兵と戦ふ可きや、決
して戦ふ可らず。今の我學術を以て西洋人に教ゆ可きや、決して教ゆ可きものなし。却て之を彼に學で尙其及ざるを恐
るゝのみ。外國に留學生あり。内國に雇の教師あり、政府の省、寮、學校より、諸港に至るまで、大概皆外國人を雇は
ざるものなし。或は私立の會社學校の類と雖ども、新に事を企るものは必ず先づ外國人を雇ひ、過分の給料を與へて之

に依頼するもの多し。彼の長を取て我短を補ふとは人の口吻なれども、今の有様をみれば、我は悉皆短にして彼は悉皆長なるが如し。」このやうな形況は、まことに遺憾ではあるが、止を得ざるの勢といはなければならぬ。だから、「一時の供給を彼に仰ぐも國の失策と云ふ可らず。然りと雖ども、他國の物を仰で自國の用を便ずるは、因より永久の計に非ず、唯これを一時の供給と視做して強て自ら慰るのみなれども、其一時なるものは何れの時に終る可きや。其供給を他に仰がずして自から供するの法は如何して得べきや。これを期すること甚だ難し。唯今の學者の成業を待ち、此學者をして自國の用を便せしむるの外、更に手段ある可らず。即是れ學者の身に引請たる職分なれば、其責急なりと云ふ可し。」學者の目的、職分、責務を論ずる福澤の論法はこのやうな順序を追つて進む。學者をして「尙三五年の艱苦を忍び眞に實學を勉強して後に事に就かしめ」、「大いに成すことあら」しめ、「日本全國に分賦せる智徳に力を増して、西洋諸國の文明と鋒を争ふの場合の至る可き」ことが、自分の存意であると云ひ、「其智恵の鋒を争ふの相手は外國人なり、此智戦に利あれば則ち我國の地位を高くす可し、之に敗すれば我地位を落す可し、其望大にして期する所明なりと云ふ可し」(「學問のすゝめ」十編)と説いてゐる。

このやうに、學者の使命が對外的關係において把握されてゐると同時に、時局急轉回と結びつけて、時代的關係においても自覺されてゐる。「事を爲すには時に便不便あり、苟も時を得ざれば有力の人物も其力を逞ふること能はず、古今其例少なからず。……西洋の説漸く行はれて遂に舊政府を倒し諸藩を廢したるは、唯これを戦争の變動と視做す可らず。文明の功能は僅に一場の戦争を以て止む可きものに非ず。故にこの變動は戦争の變動に非ず、文明に促される人心の變動なれば、彼の戦争の變動は既に七年以前に止て其跡なしと雖ども、人心の變動は今尙依然たり。凡そ物動

かざれば、これを導く可らず。學問の道を首唱して天下の人心を導き、推してこれを高尚の域に進ましむるには、特に今の時を以て好機會とし、この機會に逢ふ者は即ち今の學者なれば、學者世のために勉強せざる可らず」(「學問のすゝめ」九編)。對外的危機と云ふに、内國文明の一大轉期に、際會してゐる學者に對つて、右様の自覺をうながしてゐる。そこには、福澤の維新觀が端的に表明され、維新革命は學者のまさに奮起すべき好機會なることを説いてゐる。

第二の國民啓蒙に理性の自由な使用の必要なる點については、福澤は「學問のすゝめ」八編に、エイランドに従つて、人の働をまづ身心二つの分野に別け、更に心の働を(一)智慧(intelligence) (二)情欲(desire) (三)至誠の本心(conscience) (四)意見(will)に四分し、人たるものは、これら身心の働きを自由自在に取扱ひ、以て一身の獨立を致すべきであると訓へてゐるが、同十二編には、「人の品行は高尚ならざる可らざる」ことを論じて、至誠の本心即ち良心を磨くことの必要を唱へてゐる。醫者の不養生といひ、論語讀みの論語知らずといふ世の諺にもあるやうに、「事物の是を是とする心と、其是を是として之を事實に行ふの心とは、全く別のものにて、此二の心なるものは或は並び行はるゝことあり、或は並び行はれざることあり」、まことにむづかしいものであつて、人の見識品行を高尚ならしめ、この二の心を並び行はしめるには、たゞ「玄理を談じて」も無駄であるし、徒らに「聞見を博くするのみ」でも不可能であるといひ、「然ば則ち、人の見識を高尚にして其品行を提起するの法如何にす可きや」と自から問ひを發し、この問ひに自から答へて、「其要訣は、事物の有様を比較して上流に向ひ、自から満足することなきの一事に在り。但し、有様を比較するとは唯一事一物を比較するに非ず、此の一體の有様と彼の一體の有様とを並べて、双方の得失を殘らず察せざる可らず」と述べてゐる。右は至誠の本心即ち良心(實踐理性としての)の練磨を訓へたもので、「文明論之概略」(卷三第六章)

に説かれてゐる、人の智徳の働を支配する、聰明睿智（見方によつて、大智とも大徳とも呼びうる）と福澤はいつてゐる）と、ここに云ふ至誠の本心とは、同じものであるらしい。之を要するに、「方今我國民に於て最も憂ふ可きは其見識の賤しき事なり。之を導て高尚の域に進めんとするは因より今の學者の職分なれば、苟も其方便あるを知らば力を盡して之に従事せざる可らず」といふのが、福澤のねらひである。學問の方途として、福澤は視察（ラプセルヴェーション）・推究（リーゾニング）・讀書（この三つは智見を集める術）・談話（智見を交易する術）・著書・演説（この二つは智見を散ずる術）といふ六つの術を指摘してゐるが、このうち、特に談話と演説との二つを見識を高尚ならしめるに役立つ方術として高く評價してゐる（「學問のすゝめ」十二編）。以上は、慶應義塾が、單なる一處の學塾として満足せず、智徳の模範、氣品の源泉たらんとした、その理論的根據を、福澤が明にしたものといへる。

第三の社會の「ミヅルカラス」に屬する學者の從學については、福澤は彼等の從事すべき學問の趣意と内容とに關説してゐる。福澤は、所謂「實學」に「人間普通日用に近き實學」と、「志を高遠にして學術の眞面目に達」すべき高尚なる「眞の學問」（「學問のすゝめ」初篇、十編）との二種あることを指摘し、學問の趣旨には、「自力に食むため」と「人間交際（社會）のため」との二様あることを説いて（同、九編）、學者はすべからず、「自力に食むの一事にては未だ學問の趣意終れりとするに足らず」と考へて、「普通日用の實學」を以て満足せず、世のため人のために働きうるやうに、志を高く持つて、「高尚の學」に勉めなければならぬことを勧めてゐる。福澤は、「學問のすゝめ」初編などに、「人民同權の説を主張し、人々自から其責に任じて自から其力に食むの大切なるを論じた」けれども、それは理由があつてのこと、その理由は、「我國士族以上の人、數千百年の舊習に慣れて、衣食の何物たるを知らず、富有の由て來る所を

辨ぜず、傲然自から無爲に食して、これを天然の權義と思ひ、其狀恰も沈湎冒色前後を忘却する者の如し。この時に當り、この輩の人に告るに何事を以てす可きや。唯自食の説を唱へて其醉夢を驚かすの外手段なかる可し。是流の人に向て豈高尙の學を勸む可けんや。世を益するの大義を説く可けんや。假令ひこれに説勸るも、夢中學に入れば、其學問も亦夢中の夢のみ。卽是れ我輩が専ら自食の説を主張して、未だ眞の學問を勸めざりし由縁なり」と辯解してゐる。自食の説は、それ故、専ら「周ねく徒食の輩に告るものにて、學者に諭す可き言に非」ざることを言明し、學者に對つては、「學問に入らば大に學問す可し」と叫び、「農たれば大農たれ、商たれば大商たれ、學者小安に安んず勿れ」とさとしてゐるのをみると、當時の慶應義塾の教師や學生の從學の心意氣の奈邊にあつたかを如實に知ることが出来る。

明治九年三月福澤が自ら筆を執つて起草し、社中に示した「慶應義塾改革の議案」の劈頭には、「我慶應義塾教育の本旨は、人の上に立て人を治るの道を學ぶに非ず、又人の下に立て人に治めらるゝの道を學ぶに非ず、正に社會の義務を盡さんとするものなれば、常に其精神を高尙の地位に安置せざる可からず」とあり、次に「學問の目的を爰に定め、其術は讀書を以て第一歩とす。而して其書は有形學及び數學より始む。地學、窮理學、化學、算術等、是なり。次で史學、經濟學、修身學等、諸科の理學に至る可し。何等の事故あるも此順序を誤る可からず」とある。まさに、初期慶應義塾の學問と教育との主義精神を要約した文章であるといふことができる。

明治に入つて間もなく、福澤がエイランドのモラル・サイヤンスを読みえたことは、福澤の學問に論理の基磐を與へ、「獨立の論理」を完成せしめるに役立つた。福澤は、こゝに完成した「獨立の論理」を以て、これを尺度として、學問

その他文明の事象を縦横に論じはじめた。前に挙げた啓蒙の問題も、「ミッツルカラッス」の問題も、實學の問題も、人民や政府や國家の問題も、そのほか福澤がとりあげたいかなる問題も、すべてこの「獨立の論理」にあてはめて考へられ、論じられてゐる。三田時代になつて、バックルを読み、ミルを読み、スペンサーを読み、トクヴィルを読み、キゾーを読んで、福澤の學問的視界と内實とはますます豊かになり、多彩になつては行つたが、「獨立の論理」はつねに變らず、思索の根底にあつたらしい。

例へば、福澤の學問觀において、この「獨立の論理」が最も端的に表明されてゐるのをみいだす。(「學問のすゝめ」初編、八編)
 「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし。唯學問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無學なる者は貧人となり下人となる」のであつてみれば、貴賤貧富の現實的差別は學問の有無に由來し、天の約束ではない。それでは人は何故學問につとむべきかといふに、天の約束たる人民同權の理を、天與の賦力を働かせることによつて、實現すべきであるからである。しかし、その際問題になるのは、天與の賦力の働かせ方如何であつて、學問をするに當つて心得なければならぬのは、まさにこの一事である。福澤は、この一事について、次のやうに述べてゐる。「學問をするには、分限を知る事肝要なり。人の天然生れ附は、繋がれず縛られず、一人前の男は男、一人前の女は女にて、自由自在なる者なれども、唯自由自在とのみ唱へて、分限を知らざれば、我儘放盪に陥ること多し。即ち其分限とは、天の道理に基き、人の情に従ひ、他人の妨を爲さずして、我一身の自由を達することなり。自由と我儘との界は、他人の妨を爲すと爲さざるとの間にあり」(初編)。こゝに學問をするものゝ心得として述べられた「分限の原理」は、まさに所謂「獨立の論理」にほかならない。福澤は「學問のすゝめ」八編にも、この「分限の原理」に言及して、次のやうにのべてゐる。

人たるものは、天から與へられた身心の能力を「自由自在に取扱ひ、以て一身の獨立を爲すもの」であるが、唯この身心の「力を用るに當り、天より定めたる法に従て、分限を越えざること緊要なるのみ。即ち其分限とは、我もこの力を用ひ他人もこの力を用ひて相互に其働を妨げざるを云ふなり。斯の如く人たる者の分限を誤らずして世を渡るときは、人に咎めらるゝこともなく、天に罪せらるゝこともなかる可し。これを人間の權義と云ふなり」。このやうにみてもくると、「分限の原理」は、ひとり學問をする場合のみならず、人の世に處するに當つて、いついかなる場合にも、心得べき道理といはざるをえない。人は分限を越えざることによつて、能く自他の獨立を完ふしうる。分限を越えず、自他の獨立を保持するとは、「天の道理に基き人の情に従ひ、他人の妨を爲さずして我一身の自由を達する」ところに存するとすれば、それは對立する二つのもの、「理」と「情」との「統一の原理」であると、福澤は考へてゐたらしい。福澤が個人にも國家にも獨立の權義の存することを説いてゐることは、ひとのよく知るところであるが、慶應義塾に ついても亦、「獨立の塾」と誇稱して、次のやうに述べてゐる。

我輩今日慶應義塾に在て明治七年一月一日に逢へり。此年號は我國獨立の年號なり。此塾は我社中獨立の塾なり。獨立の塾に居て獨立の新年に逢ふを得るは亦悦ばしからずや。蓋しこれを得て悦ぶ可きものは、これを失へば悲となる可し、故に今日悦ぶの時に於て他日悲むの時あるを忘る可らず（「學問のすゝめ」五編）。（昭和二十八年十二月八日）

附記

ここに「初期慶應義塾」とは、明治二十三年の大學部設置以前の時期を云ふ。従つて、右の拙文は未完である。明治八年の「文明論之概略」以後における、福澤及びその門下の多彩多方面の學問的活動を背景とする、慶應義塾の學問の展開が、残された今後の研究の眼目である。